

様式(7)

報告番号	甲 保 第 6 号 乙 保
論 文 内 容 要 旨	
氏 名	中木里実
題 目	Relationship between identity and attitude toward death in Japanese senior citizens (高齢者の自我の状態と死への態度との関連について)
<p> <b>【目的】</b> 高齢者が自分自身の死について避けることなく、考えを巡らせることは、自身が成熟し人生を全うするために貴重な時間であると考えられる。高齢者が生涯発達の最終段階である「自我の統合」を達成し、より健康的な終末を迎えることが超高齢社会における社会的課題である。健康な人生を全うすることを支援するのが、保健医療従事者に求められている役割であると考えられる。高齢者の自我発達の視点から死を迎える態度との関連について、日本国内で健康な高齢者を対象としたこのような研究は行われていない。そこで本研究では、地域で暮らしている高齢者のうち質問紙による回答やインタビューに応じることができる高齢者を対象に、自我の発達段階と自分自身の死を迎える態度との関連について明らかにすることを目的とした。                 </p> <p> <b>【方法】</b> A 県内のシルバー大学生約 500 人を対象とした。質問紙調査と面接調査からデータを収集した。質問紙調査の内容は、エリクソン心理社会目録検査 (EPSI) と死への態度尺度 (DAP-R) を用いた。さらにその回答者の中から協力の意思を示した対象者への半構造化面接を行った。面接内容は、誕生から現在に至るまでの 4 つの発達段階に分かれるインタビューガイドを作成して用いた。質問紙調査の回収率は 85.4% (427 人) であり、面接調査には 10 人が参加した。量的データと質的データを基に分析した。本研究は徳島大学病院臨床研究倫理審査委員会の承認 (第 1468 号) を得ている。                 </p> <p> <b>【結果】</b> EPSI 下位因子と DAP-R 下位因子の相関は、「統合性」と「死の恐怖」及び「死の回避」の間にやや強い負の相関、「統合性」と「逃避型受容」との間に弱い負の相関があった。面接によるこれまでの人生の振り返りでは、【周りの人との信頼関係】、【努力に対する自負】、【社会に役立ちたい】、【あるがまま】の 4 つのカテゴリーが抽出された。                 </p> <p> <b>【考察】</b> 結果から、自分のこれまでの生き方を受け入れて、うまくいかなかったことも含めて、この人生でよかったのだと納得することが死の恐怖を低くすることが明確となった。幼い頃から形成された【周りの人との信頼関係】を基盤として、【努力に対する自負】や【社会に役立ちたい】という態度が養われていったと推察される。これまでの人生を振り返った時に、いろいろあったがすべてをよしとして【あるがまま】に受け入れることが、死に対しても【あるがまま】に臨める態度につながっていると考えられた。量的データ及び質的データから、統合性が死を避けずに受け入れる態度形成につながっていることが示唆された。本研究の成果は、健康であっても避けられない「やがて来る死」を受けとめることにより、今の生き方を充実させるという考え方で、高齢者が健康な人生を全うすることを支援することに貢献できる。                 </p>	